

上条

報告

第66号
平成26年11月

甲州市教育委員会
☎32-5097

全国伝統的建造物群保存地区協議会 関東甲信越静ブロック会議及び担当者研修会

関東甲信越静ブロック会議と研修会

桐生市桐生新町（製織町）

本年度の全国伝統的建造物群保存地区協議会の関東甲信越静ブロック会議と担当者研修会が、十月二十二日から二十三日まで、群馬県桐生市において開催されました。

桐生市は群馬県の東端に位置し、市制施行は大正十年と大変古い歴史を有しています。平成十七年に新里村・黒保根村を編入し新市となりましたが、もとの桐生市と新里・黒保根の両村の間に「みどり市」が誕生したため、全国的にも珍しい「飛び地合併」になってしまいました。

桐生といえば織物のまちです。『続日本紀』には和銅七年（七一四）に「あしぎぬ」を朝廷に納めたとの記録があり、今年は一三〇〇年に当たため、市をあげて広報活動をしているところです。

重伝建地区の桐生新町は、JR桐生駅の北側に所在します。天満宮から南へ真っ直ぐ道を延ばし、計画的な地割で桐生の礎をつくった場所で、現在は本町一丁目から六丁目まで区分されていますが、保存状態の良い一丁目と二丁目、さらに天満宮の境内が重伝建地区の範囲となります。



伝建地区内ではありませんが、「桐生明治館」という洋風の重要文化財。甘草屋敷を整備する際、その活用方法を参考にするため、3度ほど見学したことがあります。

全国伝統的建造物群保存地区協議会は、地域ごとに六つのブロックに分かれ活動しています。その中でも関東甲信越静ブロックは、毎年ブロック会議と研修会を開催しており、最も活動しているブロックです。

十月二十二日の午後二時から会議が始まり、その後研修会となりました。研修会ではまず桐生市の担当から「桐生新町重伝建地区にて発生した火災の報告」があり、それによると本年八月に重伝建地区内で住宅火災が発生し、一棟が全焼したものの延焼による被害はなかったとのことでした。

続いて基調講演では、早稲田大学の長谷見教授から「伝統的建造物・伝建地区の火災とその対策」、小山工業高等専門学校横内先生から「まちづくりとヒトづくり」と題した講演をいただきました。両先生とも桐生新町の調査などを通じて地区のことを熟知しているだけでなく、他の重伝建地区との比較や、協力体制の構築などの作業を通じて、地区の活性化と防災対策を進めています。

翌二十三日は重伝建地区の視察研修です。まず地区の概要について説明を受けた後、低速電動コミュニティバスで重伝建地区に移動し、担当者の案内で視察をしました。



街中を走る低速電動コミュニティバス。

【地区の歴史】

正平五年（一三五〇）、桐生国綱が柄杓山城を築きます。この城は重伝建地区よりずっと北部にあり、元龜四年（一五七三）の桐生氏滅亡を経て、天正十八年（一五九〇）徳川家康領となったところで廃城となりました。翌天正十九年、家康の命で大久保長安の手代大野八右衛門により、新たに町立てが始まり、在郷町として発展してきました。それが重伝建地区を含む現在の本町です。

地区の北端に天満宮を遷座し、ここを起点として南北に幅約五間（一〇メートル）の道を造り、その両脇に間口六・七間、奥行き四十間という短冊状の敷地割りが施され、近村からの入植者を募り住まわせるなど、計画的なまちづくりが行われました。

所在地

群馬県桐生市本町一丁目及び二丁目の全域並びに天神町一丁目の一部

種別

製織町

条例制定年月日

平成二〇年九月二十九日

選定年月日

平成二四年七月九日

地区面積

約一三・四ヘクタール

保存物件数

建築物 一七七件

工作物 一七三件

環境物件 八件

群馬県桐生市・桐生新町

【保存地区の特徴】

地区内には約四〇〇棟の建物があり、そのうち約六割が昭和初期までに建てられた建物です。

本町通りに面する建物は、主に切妻造・平入りが多く、寄棟造などもみられます。ほとんどの建物が通り側に下屋を設け、通り側が店舗、後ろ側が居住部という形態をとります。

桐生の織物工場といえば、有名なのが地図の記号にもなっている「ノコギリ屋根工場」です。鋸歯状の屋根の北側に窓を設け、直射でない光を工場内に入れることで、繊細な織物の作業や色調などを確認していました。保存地区内に工場は少ないものの、本町通りに面しては造られず、通りの奥に建ちます。

【建物の整備と活用】

重伝建に選定されたばかりということと、東日本大震災で屋根などが被災したこと、本年二月の大雪でも庇が落ちてしまったなどの理由で、根本的な修理や修



代表的な町並み景観。



レンガ蔵「有隣館」(旧矢野蔵群)。



天満宮まで真っ直ぐな本町通り。

景はまだ始まったばかりという印象です。

しかし活用は、ノコギリ屋根工場やレンガ蔵など、近代化に伴い建設された建物で進んでおり、マスコミや雑誌などにも大きく取り上げられています。



大谷石造のノコギリ屋根工場。

視察研修終了後、同じ群馬県内で前から行ってみたと思うていた所へ向かいました。中之条町の「六合(くに) 赤岩」という重伝建地区です。ここは、上条と同様に山村・養蚕集落です。

中之条町は、渋川市から西進するとすぐに町内に入りますが、六合赤岩はさらに西進し、草津温泉の手前付近に所在します。今年六月に「富岡製糸場と絹産業遺産群」が世界遺産に登録されましたが、暫定リストには構成資産として重伝建地区も入っていました。

中之条町六合赤岩(山村・養蚕集落)

所在地	群馬県吾妻郡中之条町大字赤岩
種別	山村・養蚕集落
条例制定年月日	平成二十二年三月二十八日
選定年月日	※旧六合村が中之条町に併合された日 平成一八年七月五日
地区面積	六三・〇ヘクタール
保存物件数	建築物 六七件 工作物 一一七件 環境物件 九件

【保存地区の概要】

赤岩地区は南北に流れる白砂川が形成下河岸段丘上にあり、集落の標高は六九〇〜七二〇メートルを測ります。山仕事だけでは生活できないので、副業としての養蚕が主産業として発達した集落といわれていますが、その時期は幕末に近かったと思われる。

主屋は幕末以降の建築が多く、その後に建てられたものも伝統的なデバリ(出梁)形式をとり、正面の二階部を前に張り出しています。修理事業で、正面の建具を木製ガラス戸に変更した主屋が増えています。

上条と同様、大きな主屋に豊富な附属屋の屋敷構えですが、雰囲気は笛吹市の上芦川地区に似ています。



集落の俯瞰。通りの両側に屋敷が並びます。



主屋のデバリ。養蚕作業のためでしょう。



同じデバリでも、妻側に付けるものもあります。



通りの風景。火の見櫓も工作物として保存。